

『成熟児頭蓋内出血の臨床的検討』

(分担研究： 新生児の頭蓋内出血に関する研究班)

那須田 馨,* 志 村 浩 二*

要 約

早期新生児期に、頭蓋内出血を発症したと思われる、出生体重 2,500 g 以上の児について、全国主要新生児養育施設 114 施設へのアンケート調査を行い、394 症例が集計された。出血部位を問わず、重症仮死合併例の予後が、また、意識障害、筋緊張低下といった脳抑制症状が目立つ症例が、予後不良であった。

見出し語： 成熟児、頭蓋内出血

目 的

頭蓋内出血は、仮死と並んで成熟新生児の発達予後に影響する重篤な病態である。そこで全国的な疫学調査を行ない、その頻度、臨床症状、予後など臨床的問題点を明らかにし、診断・治療のポイントを探ってみたい。

方 法

全国主要新生児養育施設 114 施設へのアンケート調査。

対 象

早期新生児期に、頭蓋内出血を発症したと思われる、出生体重 2,500 g 以上の児。

結 果

症例は 394 例で、男児が 275 例、70% を占めた。院内出生は 117 例、29.7% であった。死亡は 30 例、7.6% にみ、平均死亡日令は 32.7 ± 70.5 (0 ~ 295) であった。生存例との比較で、

仮死、脳室拡大を伴う脳室内出血、大脳の実質内出血、人工換気、意識障害、筋緊張低下、けいれんを有意差をもって多くみた。

出血部位では、くも膜下出血が 56.1%、脳室内出血が 20.3%、そして脳実質内出血が 11.2% であった(表 1)。予後の面からみると、脳室内出血では、当然のことながら脳室拡大を伴う症例ほど予後不良で、死亡率、てんかん発症率が高かった。また、仮死を伴わない、原発性くも膜下出血は、臨床症状にも乏しく、予後も良好であった。

臨床症状としては、けいれん、易刺激性、筋緊張低下の順に多くみたが、棄却限界法で正常域を定め検討してみると(図 1)、意識障害が最も早く気付かれ、ついで易刺激性、眼球運動異常と続き、頻度の多かったけいれんは、平均日令 1.2 と遅れてみられていた。

主な治療法としては、反復腰椎穿刺が 20% に、

* 静岡県立こども病院新生児科

外科的血腫除去術が11%，そして脳室腹腔短絡術が3%にみられた。

後障害としては、麻痺を8.6%に、精神発達遅滞を8.9%に、てんかんを6.3%に残した。いずれの後障害も、障害を残さなかった予後良好群に比し、新生児仮死、脳室拡大を伴う脳室内出血、意識障害、眼球運動異常、筋緊張低下、けいれん、人工換気、脳室腹腔短絡術を多くみた(表2)。

結 語

早期新生児期に、頭蓋内出血を発症したと思われる、出生体重2,500g以上の児について、全国主要新生児養育施設114施設へのアンケート調査を行った。

394症例が集計されたが、30例、7.6%の死亡例をみた。

出血部位としては、くも膜下出血が最も多く、仮死を伴わない原発性のものは症状も軽く、予後良好であった。これに対し、脳室拡大を伴う脳室内出血、実質内出血は予後不良例が多かった。

臨床症状としては、頻度の最も多かったけいれんよりも早くから、意識障害、易刺激性、眼球運動異常、筋緊張低下がみられており、けいれんがかなり進んだ症状であることを示唆する結果をみた。

後障害としては、麻痺を8.6%に、精神発達遅滞を8.9%に、てんかんを6.3%に残したが、新生児仮死、脳室拡大を伴う脳室内出血、意識障害、眼球運動異常、筋緊張低下、けいれん、人工換気、脳室腹腔短絡術をみた症例に予後不良例が多かった。

表1.
出血部位による分類

脳室内出血		
脳室拡大なし	48	(12.2%)
脳室拡大あり	32	(8.1%)
くも膜下出血	221	(56.1%)
硬膜下出血	63	(16.0%)
SAHorSDH	74	(18.8%)
実質内出血	44	(11.2%)
硬膜外出血	4	(1.0%)

(重複例を含む)

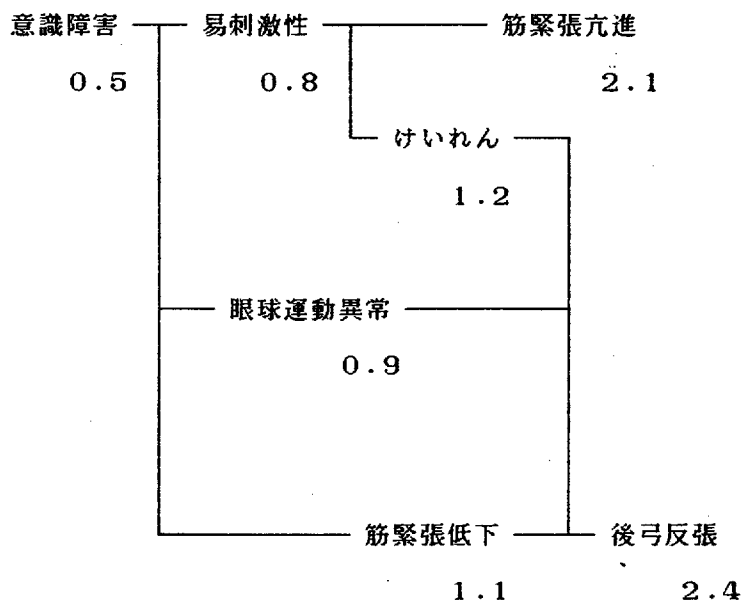
表 2

てんかんを残した症例の検討

P<0.05

	I V H 拡大あり	新生児仮死	意識障害
てんかん	7	15	8
25	(28.0)	(60.0)	(32.0)
予後良好群	9	91	19
255	(3.5)	(35.7)	(7.5)
	眼球運動異常	筋緊張低下	
あり	8	10	
	(32.0)	(40.0)	
なし	38	50	
	(14.9)	(19.6)	
	けいれん	人工換気	短絡術
あり	23	9	5
	(92.0)	(36.0)	(8.0)
なし	72	26	1
	(28.2)	(10.2)	(0.4)

発症時期（数字は日令）



各症状間には $P < 0.05$ で有意差あり

図1.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

早期新生児期に、頭蓋内出血を発症したと思われる、出生体重 2,500g 以上の児について、全国主要新生児養育施設 114 施設へのアンケート調査を行い、394 症例が集計された。出血部位を問わず、重症仮死合併例の予後が、また、意識障害、筋緊張低下といった脳抑制症状が目立つ症例が、予後不良であった。